

長徳寺の由来

本尊 十一面観世音菩薩 元 法相宗 慶長年間に改宗し曹洞（禅）宗となった。

推古天皇の御宇、琳聖太子が百濟より接抱された観音像が鳴谷の地で靈光を発したことから、この地を靈場とされ堂宇を建立、併せて精舎を建立、長徳寺を開創された。

その後、百濟より佛師安阿彌が来たりて十一面観音像を彫刻、彼の像を体内仏として納めたのが現在の本尊である。

脇立本尊の不動明王、毘沙門天は弘法大師の作と伝承されている。注古より周防国順拝三十三靈場の中第九番にて、毎年三月十八日には「長徳寺市」と呼んで遠近より善男善女の参詣が絶えない。

慕義塾跡

勤皇佐幕の風雲、急を告げる元治元年、領主清水美作親春は家老難波平庵に命じ当寺に「慕義塾」を創設、家臣や農民の子弟を集め文武両道を練磨する道場とした。

塾に集まる者数百十名、遠く膳所番からも馳参してゐる。

昭和五十四年四月一日

光市観光協会